

# 夜あるき

永井荷風

青空文庫



余は都会の夜を愛し候。燦爛たる燈火の巷を愛し候。

余が箱根の月大磯の波よりも、銀座の夕暮吉原の夜半を愛して避暑の時節にも独り東京の家に止り居たる事は君の能く知らるゝ処に候。

されば一度ニューヨークに着して以来到る処燈火ならざるはなき此の新大陸の大都の夜が、如何に余を喜ばし候ふかは今更申上るまでもなき事と存じ候。あゝ紐育は実に驚くべき不夜城に御座候。日本にては到底想像すべからざる程明る眩き電燈の魔界に御座候。

余は日沈みて夜来ると云へば殆ど無意識に家を出で候。街と云はず辻と云はず、劇場、料理店、停車場、ホテル、舞踏場、如何なる所にててもよし、かの燦爛たる燈火の光明世界を見ざる時は寂寥に堪へず、悲哀に堪へず、恰も生存より隔離されたるが如き絶望を感じ申候。燈火の色彩は遂に余が生活上の必要物と相成り申候。

余は本能性に加へて又知識的にこの燈火の色彩を愛し候。血の如くに赤く黄金の如くに清く、時には水晶の如くに蒼きその色その光沢の如何に美妙なる感興を誘ひ候ふか。碧深き美人の眼の潤ひも、滴るが如き宝石の光沢も、到底これには及び申さず候。

余が夢多き青春の眼には、燈火は地上に於ける人間が一切の欲望、幸福、快樂の象徴なるが如く映じ申候。同時にこれ人間が神の意志にもと戻り、自然の法則に反抗する力ある事を示すものと思はれ候。人間を夜の暗さより救ひ、死の眠りよりさま覚すものはこの燈火に候。燈火は人の造りたる太陽ならずや、神をあざけ嘲りて知識に誇る罪の花に候はずや。

さればこの光を得、この光に照されたる世界は魔の世界に候。醜行しうかうの婦女もこの光によりて貞操の妻、徳行の処女よりも美しく見え、盜賊おもての面も救世主の如く悲壯に、放蕩ほうたう児じの姿も王侯の如くにけだか気高く相成り候。神の榮えさか靈魂の不滅を歌ひ得ざる墮落の詩人は、この光によりて初めて罪と暗黒の美を見出みいだし候。ボードレールが一句、

Voice le soir chermant, ami du criminel;

[Il vient comme un complice, a` pas de loup; le ciel]

[Se ferme lentement comme une grande alco\ve;]

[Et l'homme impatient se change en be\ve fauve.]

「悪徒の友なるいと懐いとしき夜は狼の歩みしづか静かに共犯人かたうどの如く進み来りぬ。いと広き寝屋ねやの如く

に、空徐おもむろとぎに閉とさるれば心焦立いらだつ人は忽野獸たちまちの如くにぞなる……と。余は昨夜も例の如く街に灯ひの見ゆるや否や、直たゞちに家を出で、人多く集り音楽湧わきいづ出るあたりに晚餐を食して後のちとある劇場に入り候。劇を見る為めには非ず、金色こんじきに彩りたる高き円天井まるてんじやう、広き舞台、四方の棧敷さしきに輝き渡る燈火の光に酔よはんが為めなれば、余は舞姫多く出で、喧かしましく流は行歌やりうたなど歌ふ趣味低きミュージカル、コメデーを選び申候。

こゝに半夜を費し聽つひややがて閉場のワルツに送られて群集と共に外に出るや、冷き風颯然さつぜんとして面を撲うつ……余は常に劇場を出でたる此の瞬間の情味を忘れ得ず候。見廻す街の光景は初夜の頃入場したる時の賑にぎやかさには引變ひきかへて、静り行く夜の影深く四辺あたりを罩こめたれば、身は忽然見も知らぬ街頭に迷まよひ出でたるが如く、臃おぼろげ気なる不安と、それに伴ふ好奇の念に誘はれて、行手も定めず歩み度き心地に相成り候。

然り、夜深よふけの街の趣味は、乃ちこの不安と懷疑と好奇の念より呼び起さるゝ神秘こゝろあに有これあ之候。既に灯ひを消し、戸を閉としたる商店の物陰に人佇立たゝずめば、よし盗ぬすびと人の疑うたがひは起さずとも、何者の何事をなせるやとて窺うかがひ知らんとし、横よこちやう町の曲り角に制服かみしいかめしき巡查の立つを見れば、訳もなく犯罪を連想致し候。帽子を眉深まぶかに、両手を衣囊かぶに突つきこ込みて歩み行く男は、皆賭博に失敗して自殺を空想しつゝ行くものゝ如く見え、闇より出で、

闇の中に馳過る馬車あれば、其の中には必ず不義の恋、道ならぬ交際の潜めるが如き心地して、胸は訳もなく波立ち、心頻に焦立つ折から、遙か彼方に、ホテルやサルーンの燈火、更けたる夜を心得顔に赤々と輝くを望み見れば、浮世の限りの楽みは此処にのみ宿ると云はぬばかり。入りつ出でつ揺く男女の影は放蕩の花園に戯れ舞ふ蝶に似て、折々流れ来る其等の人の笑ふ声語る声は、云難き甘味を含む誘惑の音楽に候はずや。

恐しき「定め」の時にて候。この時この瞬間、宛ら風の如き裾の音高く、化粧の香を夜気に放ち、忽如として街頭の火影に立現るゝ女は、これ夜の魂、罪過と醜悪との化身に候。少女マルグリットの家の戸口に悪魔が呼出す魔界の天使に御座候。彼女等は夜に彷徨ふ若き男の過去未来を通じて、その運命、その感想の凡てを洞察し尽せる神女に候。

されば男は此処にその呼び止る声を聞きその寄添ふ姿を見る時は、過ぎし昔の前兆を今又目前に見る心地して、その宿命に満足し、犠牲に甘んじて、冷き汚辱の手を握り申候。余は劇場を出で、より更け渡りたるブロードウエーを歩みくゝて、かのマヂソン広小路に石柱の如く聳立つ二十余階の建物をば夢の楼阁と見て過ぎ、やがて行手にユニオン広小路とも覺しき樹の繁り、その間を漏るゝ燈火を望み候。近けば木蔭の噴水より水の滴る響

静き夜に恰も人の噉り泣くが如くなるを聞き付け、其のほとりのベンチに腰掛け、水の面に燈影の動き碎くるさまを見入りて、独り湧出る空想に耽り候。

余は何者か、余に近く歩み寄る蹻音、続いて何事か囁く声を聞き候ふが、少時にして再び歩み出せば、……あゝ何処にて捕へられしや。余はかの夜の悪女と相並びて、手を引るゝまゝに、見も知らぬ裏街を歩み居り候。

見廻せば、両側に立続く長屋は塵に汚れし赤煉瓦の色黒くなりて、扉傾きし窓々には灯も見えず、低き石段を前にしたる戸口の中は、闇立ち迷ひて、其の縁下よりは悪臭を帯びたる湿気流れ出でて人の鼻を撲つ。女は突然立ち止まりて、近くの街燈をたよりに、少時余が風采を打眺め候ふが、忽ち紅したる唇より白き齒を見せて微笑み候。

余は覚えず身を顫はし申候。而も取られし手を振払ひて、逃去る決断もなく、否、寧ろ進んで闇の中に陥りたき熱望に駆られ候。

不思議なるは悪に対する趣味にて候。何故に禁じられたる果実は味美しく候ふや。禁制は甘味を添へ、破戒は香気を増す。谷川の流れを見給へ。岩石なければ水は激せず、良心なく、道念なければ、人は罪の冒険、悪の樂しみを見出し得ず候。

余は導かるゝ儘に闇の戸口に入り、闇の梯子段を上り行き候。梯子段には敷物なければ、

恰も氷を踏ふみくだ砕くが如き物音、人氣ひとけなき家からゆう中に響き、何処いづこより湧いづき出るとも知れぬ冷き湿気、死人の髪かみの如くに、余が襟元えりもとを撫で申候。

二階三階、遂に五階目かとも覚おぼしき処まで上り行き候ふ時、女はかち／＼と鍵かぎの音させ、戸を開き、余をその中うちに突き入れ候。

濃たてこき闇は此処をも立たてこ罩め候ふが、女の点ちずる瓦斯わすの灯ひに、秘密ひその雲破くもやぶれて、余の目の前まへには忽如しんじゆとして破れたる長椅子ながいす、古ふるびし寢台ねだい、曇くもりし姿見すがたみ、水溜たまたれる手洗鉢てあらひばちなど、種さま々々の家うち具ぐ雜ざ然ぜんたる一室いつしつの様よう、魔術まじゆの如ごとくに現あられ候。室へやは屋根裏やねうらと覚おぼしく、天井てんじやう低ひくして壁かべは黒くろずみたれど、彼方かなた此方こなたに脱ぬぎ捨てたる汚けれし寝衣ねまき、股もも引ひき、古足袋ふるたびなぞに、思おもひしよりは居ゐ心こゝろ好このき住家すまかと見え候。されど、そは諸君しよきんが寝藁ねわら打乱うちざんれたる犬小屋いぬこや、若わかしくは糞ふんにまみれし鳥とりの巢ねを覗のぞ見みたる時とき感かんじ給たまふ心地こゝろ好このさに御座ござ候。

眺ながめ廻まわす中うちに、女おんなは早はやや帽子ぼうしを脱とり、上う衣はぎを脱ぬぎ、白しろく短みき下シユミーズ衣ズ一いつツつになりて、余あつちまが傍かたへなる椅子いすに腰掛こしかけけ、巻煙草まきせんそうを喫くし始はじめめ候。

余あつちまは深こく腕うでを組くみみて、考こう古こ学がく者しやが沙さ漠ぼくに立たつ埃エヂプト及スフィンクスの怪あや像ざうを打うち仰あやぐが如ごとく、默もく然ぜんとして其その姿すがたを打うち目め成なり候。

見みよ。彼女かのんなが靴足袋くつたびしたる両足りやうそくをば膝ひざの上うへまでも現あらし、其その片足かたあしを片膝かたひざの上うへに組くみみ載のせ、



下衣したぎの胸ひろく、乳を見せたる半身うしろを後に反しそら、あらはなる腕を上げて両手に後頭部を支へ、顔を仰向けて煙を天井に吹く様さま。これ神を恐れず、人を恐れず、諸有あらゆる世の美德を罵り尽せし、惨酷なる、將はた、勇敢なる、反抗と汚辱との石像に非ずして何ぞ。彼女が白粉べにと入毛いれげと擬造まがひの宝石とを以て、破壊の「時」と戦へる其の面おもては孤城落日の悲壮美を示さずや。其そが重き瞼の下に、眠れりとも見ええず、覚めたりとも見えぬ眼の色は、瘴煙しやうえんと毒霧くむを吐く大沢だいたくの水の面にも譬たとふべきか。デカダンス派の父なるボードレールが、

[Quand vers toi mes de'sirs partent en caravan,]

[Tes yeux sont la citerne ou` boivent mes ennuis.]

「わが欲情、隊商カラバンの如く汝なが方かたに向ふ時、汝なれが眼は病める我が疲れし心を潤す用水の水なり。」と云ひ、又、

[Tes yeux, ou` rien ne se re've`le]

De doux ni d'amer,

[Sont deux bijoux froids ou ` se mele]

L'or avec le fer.

「嬉し悲しの色さへ見せぬ汝が眼は、鉄と黄金を混合たる冷き宝石の如し。」と云ひたるも、この種の女の眼にはあらざるか。

余は已に小春の可憐、椿姫マルグリットの幽愁のみには満足致し得ず候。彼等は余りに弱し。彼等は習慣と道德の雨に散りたる一片の花にして、刑罰と懲戒の暴風に萎れず、死と破滅の空に向ひて、悪の蔓を延し、罪の葉を広ぐる毒草の気概を欠き居り候。

あゝ悪の女王よ。余は其の冷き血、暗き酒倉の底に酒の滴るが如く鳴りひゞく胸の上に、わが悩める額を押し当る時、恋人の愛にはあらで、姉妹の親み、慈母の庇護を感じ申候。放蕩と死とは連る鎖に候。何時も変りなき余が愚をお笑ひ下され度く候。余は昨夜一夜をこの娼婦と共に、「屍の屍に添ひて横る」が如く眠り申候。





# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆72 夜」作品社

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第7刷発行

底本の親本：「荷風全集 第三卷」岩波書店

1963（昭和38）年8月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夜あるき

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>